

地方都市におけるコミュニティバスの利用状況

名古屋工業大学 学生員○長谷川 誠
ソウル市政開発研究院 正会員 都 君燮
名古屋工業大学 正会員 藤田 素弘

1. はじめに

バス不便地域において、交通体系の確立、高齢者・障害者のモビリティの確保及び環境負荷の軽減などから、郊外都市を中心に新乗合バスとして、コミュニティバスの運行がされている。しかしながら、採算面を考えると決して明るいと言いきれない。そのようなもとで、本研究においては、コミュニティバスの更なる利用者数向上を目指し、現状及び現在住民に望まれているサービスを把握する。

2. アンケート調査の概要

アンケート調査の対象地区として、コミュニティバスを除いた公共交通手段がない地域として、豊田市南部(前林地区)を選んだ。

この地区の住民の方々を対象として、ポスティングによる一斉配布、郵送による回収方式をとった。2001年12月に実施した結果、配布数:14302票中、回収票 3823 票(回収率:26.7%)を得た。調査項目としては、外出時の交通困難の有無、調査対象地域からの外出行動、コミュニティバスの利用状況及び今後の利用予定、個人属性等に関する項目を設けた。

3. コミュニティバスの現在の利用状況

(1) 利用状況

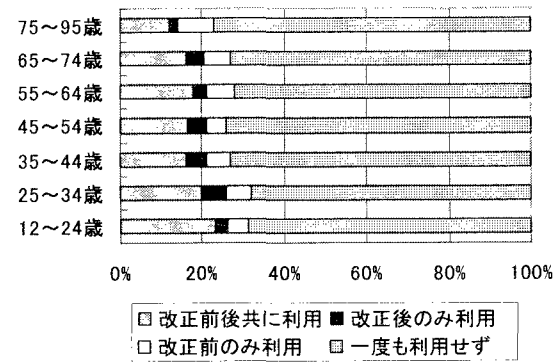


図1 年齢別利用状況

各年代共に「一度も利用したことがない」という

回答が6割を占めた。また(ダイヤ・運行路線等)の改正前後において比較すると、「改正前のみ利用」と「改正後のみ利用」の人がほぼ同数だったため、利用者数はほぼ横ばいであった。

(2) 利用頻度

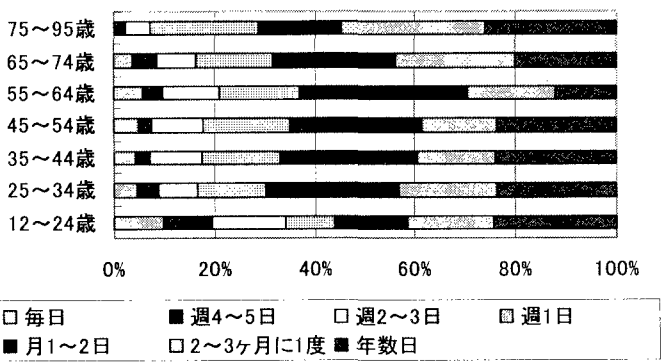


図2 年齢別利用頻度

月1~2回前後の利用が多いといえる。利用頻度は、全体として考えると、あまり高くないと考えられる。12~24歳の利用頻度が比較的に高いのは、高校生の通学や若者の通勤目的と思われる。

(3) 利用目的(複数回答)

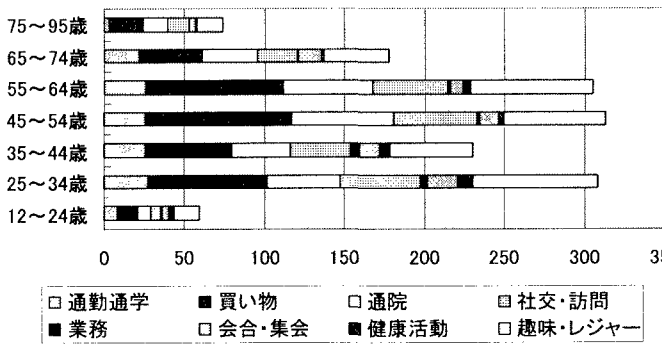


図3 年齢別利用目的

全体的にみて、通勤通学目的よりも買い物や通院や社交・訪問及びレジャーの項目で割合が高い。利用頻度と対応させて考えると、定期的な利用よりも非定期的な利用が多いと考えられる。

キーワード：豊田市、コミュニティバス、利用状況、将来予想

連絡先：〒466-8555 名古屋市昭和区御器所町 名古屋工業大学 TEL&FAX (052)735-5492

4. バスサービスの満足度

改正前後ともに利用している人を対象に、それぞれのサービスについてどのように変化したと感じたかを5段階評価で示してもらった。それぞれの数値は、「非常に良くなった」という評価を+2点とし、以下1点から-2点に相当させ、それぞれ総和し、有効回答数において除したものである。図4においては、総合判断のみ示す。このグラフから、全ての年齢層において正の値を示しているため、利用者にとって改正は意義があったといえる。

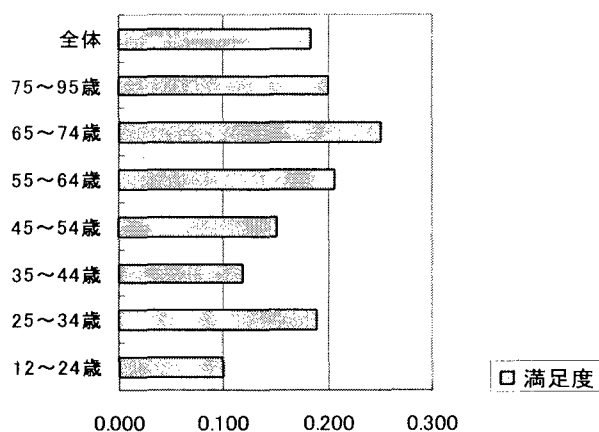


図4 サービス変化の評価(総合判断のみ)

5. しくみの認知度

このコミュニティバスは表で示すように、市・運行人会社・市民(運営協議会)の三者によって運行されている。この認知度をたずねたところ、12~24歳の層は、90%近くが認識していなかったが、その他の年齢層においては、60%前後の人が認識していた。「自分たちのバス」であることを認識している結果といえる。

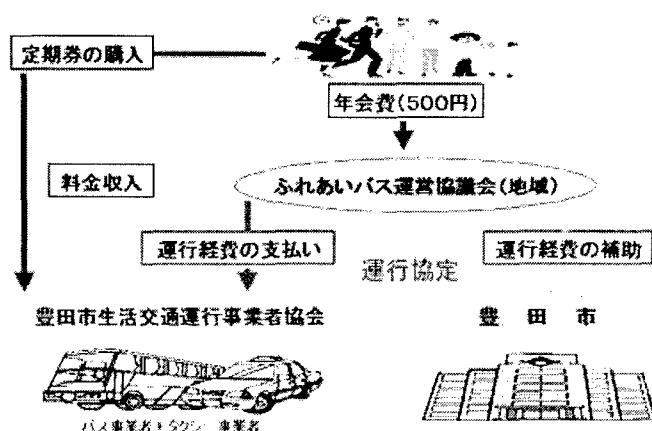


図5 しくみの図 ¹⁾

6. 運行費用の負担

「自分たちのバス」という認識はあるものの、実際に誰が運行経費を負担すべきかを示した。

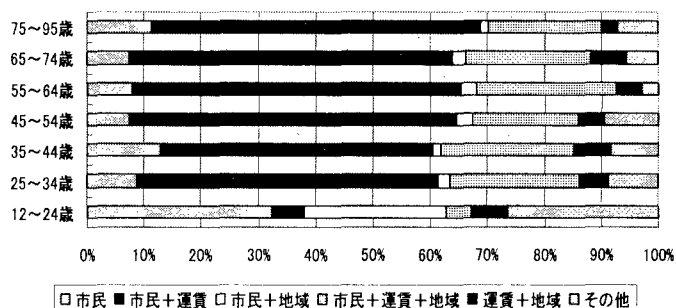


図6 運行経費負担

12~24歳を除いては、現状の「市民+運賃」が圧倒的で、それに続いて「市民+運賃+地域」となっている。だが12~24歳においては、「市民」のみ又は「市民+地域」が大多数であり、(自ら利用して)運賃を支払いたくないと思われる。

7. 今後の利用予定

今後このコミュニティバスを利用するかを尋ねた。

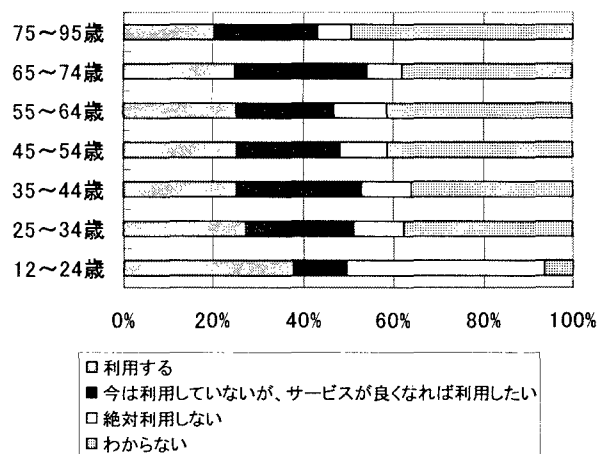


図7 今後の利用予定

「わからない」という人が多数派となったが、条件付を含めて、どの年齢層も半数前後の人が「利用したい」と考えている。

8. まとめ

7で示したように半数近くの人々は、「利用したい」と考えているが、しかし実際の利用者数は、ほぼ横ばいである。問題点は何なのかを更に追及し、今後のより良いコミュニティバスの運行に寄与したい。

最後に、本研究において調査に協力していただいた豊田市ならびに(財)豊田都市交通研究所に対して感謝の意を称します。

参考: ¹⁾ 豊田市交通政策課ホームページ